固い絆と柔らかい心を求めて
―臨床と教育の現場から―

大村　禮子

今、臨床の場で乳幼児期に実の親と離れ、養護施設に暮らす子どもたち、子どもに愛情をもって接したいのにうまく関われない親、そして療育手帳の発行を求めて来所する障碍を持つ子どもたちや親に関わり、一方では保育者を志す学生たちと接しながら、子どもたちが幸福に暮らしていく為に福祉や教育の場でできることは何かを考えさせられる毎日です。

二十一世紀、子どもの発達研究や子育て支援制度の整備、教育の再考は進み、子どもたちは幸福な生活を約束されるはずでしたのに、わが国では児童虐待、少年犯罪、更には凶悪事件の標的となる子どもたちの増加と子どもを取り巻く状況は益々悪くなっています。

行政上の対応は、えてして将来を見据えた大局的な見地からの省察よりも現実に起こっている問題への局部的な対処に追われ、実際に子どもや親が求める対応とは別の次元で議論がかわされてしまうことが往々にしてあります。専門家と呼ばれる人々に対しても単に診断や分析、問題視をするだけで、今、

現実に悩んでいる親や子どもたちの気持ちに寄り添い、本当に必要とする対応をしてくれないと批判されることも多いのが現状です。

求められる柔らかいまなざし

本当に必要な対応のできる専門家ってなんでしょう？　鯨岡峻氏は著書「〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ」の中で精神医学者のコフートの「人は自分を見る相手の瞳の中に賞賛の色合いを見出せたとき、自己愛感情が満たされて、自分の内部に自信とエネルギーが昂まってくるのを感じる」という言葉を引用し、学童期以降の子どもたちにとって大人のまなざしのなかに含まれる厳しい評価的な色合い（評価的なまなざし）を通して否定的な評価を与え続けられる子どもは、自分を次第にだめな子どもと思い、自信をなくし、実力を発揮できなくなり、その結果、劣等感を抱いてしまうという悪循環に陥る可能性があると書いていらっしゃいます。

確かに信頼できる親や保育者との良いかかわりの中で安定してきた子どもたちが小学校に上がったとたんにすっかり自信を失ってしまう事例を経験しています。人は生活上の様々な体験や出会いの中で相互に関係を発展させ、変わりうる、本来やわらかい存在であるはずなのに、教育現場の中では教育という名の下にそれまで「見守られてきた」子どもたちが「評価」の対象としか見られなくなってしまい、開きかけた心と体を再び固く閉ざしてしまうケースがあります。

医師、教師、その他の専門家は診断、評価のために子どもを見るのではなく、柔らかなまなざしでその子の良い所をしっかりと認め、固い信頼の絆の下に成長する力を信じて必要な対応をとることが必要ではないでしょうか？

硬い心と体を解きほぐす

児童相談機関にやってくる子どもたちの多くは不安から表情が硬く、こわばり、緊張の為に体も硬く、時にはぽきっと折れてしまいそうだと感じるほどです。がちがちに硬くなった心を解きほぐしていくためには、こちらはどんな切り口からも対応できる柔らかな頭と心と全てをありのままに包み込むことのできる暖かさを持ち合わせていたいものです。信頼できる大人との固い絆が結ばれた子どもたちは安心感を得て、次第に持てる力を発揮していけるようになっています。

生きる力を育む

私が子どもだった頃、風の音、雲の流れ、鳥の声、虫の声、季節毎に花が咲き、実をつける木々や草花に心動かされ、時間はゆっくりと流れていたように思われます。

戦後、物はあまりありませんでしたが、母の手作りのスカートやワンピースは私の大好きなよそゆきでしたし、多くの大人たちが一生懸命生活する姿を見て、自然に生活の知恵を身につけていったようです。今、全ての物にマニュアルがあり、それをなぞることで合理的に早く物事を習得できる世の中になっています。が、これは裏返せばマニュアルがなければ何もできない危険性をも意味しています。パソコン、携帯、インターネットの普及といったこれまでにない文化の発展が便利さを運びはしたものの、人々が長い間自然の中で培ってきた心の豊かさ、伸びやかさ、柔らかさとは正反対の硬いぎすぎすとした融通の利かない頭を持った人間をも生み出す結果となってしまってはいないでしょうか？

他人の批評や批判が上手な人はたくさん増えました。けれども人の良いところを認め、傷ついた心に寄り添い、それを支えることの出来るゆとりを持った大人の存在が減ってきたように感じられるのは私

だけでしょうか？　幼稚園教育要領の中の「ゆとりの中で生きる力を育み」、保育所保育指針にある「子どもが、現在をもっとも良く生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う」ためにはそばにいる大人たちが豊かに生き、身をもってその手本となる姿勢を示していくことが大切でしょう。様々な情報が入り、若い保育者の方々が知識や技法を学ぶ機会は以前よりずっと増えたと思いますが、保育の原点に立ち返ることを忘れないで頂きたいと願っております。

（臨床発達心理士）

かたいリュックサックへの憧れと、かたい言葉へのとまどいと

菊地　知子

およそ「かたい」ことと自分とは縁遠く思え、むしろ語るべきは、やわらかに、しなやかに、優しくあることに多いのに、とも思ったが、ふと、今は高校生になる娘の幼い日々に思いが至る。